

# 僕はこれからだ

小川未明

青空文庫



村むらからすこし離はなれた、山やまのふもとに達たつきち吉いえの家はありました。  
 彼かれは学がっこう校かえの帰かえりに、さびしい路みちをひとりで、ひらひら飛とぶ白しろい  
 こちようを追おいかけたり、また、田たのあぜで鳴なくかえるに小石こいしを  
 投なげつけたりして、道みち草くさをとつていたこともありません。そして、  
 裏うらの松まつ林ばやしにせみの鳴ないている、我わが家やが近ちかづくきゆうと急きゆうになつか  
 しくなつて、駈かけ出だしたものでした。

父ちち親おやといふのは、体からだつきのがつちりした、無むくち口はたらの働ものき者ものでし  
 た。今き日ようじゆうに、これだけ耕たがしてしまおうと心こころで決きめると、た  
 とえ日ひが暮くれかかつて、休やすまずに仕し事ごとに精せいを入いれると性せい質しつ  
 でしたから、村むらの人ひとたちからも信しん用ようされていました。とこ

ろが事変じへんの波なみは、こうした静しずかな田舎いなかへも押し寄おせてきました。彼かれには召集しょうしゅう令れいが下くだつたのであります。カーキ色の服ふくに戦鬪帽せんとうぼうを被かぶつて、赤あかいたすきをかけた父親ちちおやは肩幅かたはばの広い姿勢しせいを毅然きぜんとして、日ひの丸まるの旗はたを持もつたみんなから送おくられて、平常へいぜいは、あまり人ひとの通とらないさびしい路みちを、町まちの方ほうへといったのであります。それは、ついこのあいだのことと思おもつたのが、はや二年ねんばかりになりました。そして、その父親ちちおやが、中支ちゅうしの戦線せんせんで、激戦げきせんの際さい、戦死せんしを遂とげたという知しらせがとどいたので、さすがに、家いえのものはじめ、村むらの人々ひとびとは、まったく夢ゆめのような気がしたのであります。あの健康けんこうな、意志いしの強い男おとこが、もうけつして、もどることがないと思おもつたからでした。

達吉たつきちの母親ははおやは、やせ形がたな、女おんならしい、優やさしい性質せいしつの人ひとで

した。父親ちちおやが、いなくなつてから、達吉たつきちは学校がっこうが退ひけて、

途とちゆう中ともから友わかだちと別ひとりれて一人ひとりぼつちで帰かえると、こんど父親ちちおやに

代かわつて母親ははおやが、手てぬぐいを被かぶつてうつむきながら、たんぼで

野菜やさいの中なかに埋うもれてせつせと働はたらいているのを見みました。

しかるに、この母親ははおやとも別わかれた。達吉たつきちは、いつになつても、

その日ひのことを考かんがえるとたまらなくなるのでした。それは、父ちちお

親やの戦死せんしを聞きいたときよりも、もつと悲かなしさが深ふかく胸むねに迫せまつて

くるのでした。

母親ははおやは、まくらもとへ達吉たつきちを呼よびました。

「もし、私わたしが病びよう気で死しんだら、おまえは、東とう京きやうの伯父おおじさん

のところへいくのだよ。伯父おじさんも、いい人ひとだから、よくいうことをきくのだよ。」

そのとき、母ははおや親の目めから、涙なみだが落おちて、黄色きいろなほおを伝つたつて、まくらをぬらしたのです。

「お母かあさん、死しんじやいやだよ。」と、達たつきち吉は、急きゆうに大おおきな声こえで泣なき出だしました。すると、てつだいにきていた、村むらの女おんなの人ひとが、あわててへやへ入はいつてきて、

「なんで、お母かあさんが、坊ぼうだけ残のこして死しになさるものか。じきによくなつて、起おきなさるから、さあ、すこしあつちへいつて遊あそんできなさいね。」と、外そとへ抱だくようにして、つれていったのでした。

その夜であつた。すさまじい北風が吹き募つた。秋の深くなつたという知らせのように、風はヒユヒユウと叫んで、野原をかすめ、林の頭をかすめて、木や、枝についている葉をことごとくもぎとつていったばかりでなく、いっしよに達吉の母親の命もさらつていったのです。

翌朝、東京からきた、伯父さんが着きました。そして、数日の後には、達吉は、その伯父さんにつれられて、思い出の多い、自分の生まれたこの村から去らなければならなかつたのでした。

伯父さんの住んでいる町は、都会の片端であつて、たてこんでいる小さな家々の上に、雲のない空から日が照りつけていま

した。店にブリキ板がすこしばかり置いてあるだけの貧しい暮らしであつたが、子供がないところから、伯父さんも、伯母さんも達吉をかわいがってくれました。

「なに、工場などへいかなくたつて、家にいて、俺の手助けをすればいい。」と、伯父さんは、やっと高等小学校を出たばかりの達吉を少年工として、たとえこのごろは景気がよくても、工場へやるのにしのびませんでした。

「ああ、それがいいよ。」と、伯母さんも、いつていました。

隣家は、薪炭商であつて、そこには、達吉より二つ三年上の勇蔵という少年がありました。

「おい、達ちゃん、リヤカーに乗せてやろうか。これから、この

炭すみをとどけにいくのだから。」と、道みちの上うえに茫然ぼうぜんとして立たつて  
 いる達吉たつきちを見みつけて、声こえをかけました。

「そして、帰かえりに、梅うめの実みをもいでこようよ。」と、勇蔵ゆうぞうは元げ  
 氣んきにいいました。

達吉たつきちは、リヤカーに乗のせてもらつて、車くるまの上うえから、はじめ

見る町まちの景色けしきを物珍ものめづらしそうにながめていました。勇蔵ゆうぞうは、

品物しなものの配達はいたつを終おわると、軽かるくなつたりリヤカーをさらに勢いきおいよ

く走はしらせて、町まちを突つつ切り、原はらっぱへと出でました。広ひろ々びろとした

原はらっぱには、一角かくに屋敷跡やしきあとのようなどころがあつて、青あお々あおと

した梅林ばいりんには、実みがたくさん生なつていました。

「あれごらんよ、すっかり種たね子が固かたまっているのだぜ。」と、勇ゆう

蔵うどうが、酸すっぱそうくちな口つきをして、いいました。

達たつきち吉めの目なかの中に、このとき、北ほつぽう方ほうの憂ゆう鬱うつな黒くろい森もりの景け色しき

がよみがえったのだ。そこは、自じぶん分の生うまれた村むらである。いまも、

陣じんじん々じんとして、頭あたまの上うへを吹ふく風かぜの中なかに、たんぼの野や菜さいの葉はが白しろい

裏うらを返かえすのである、そして、やつれた母ははの涙なみだぐんだ顔かおが浮うかぶの

でありました。

「なにをぼんやりしているんだい。達たつちゃんは、実みを拾ひろわないの

。」と、勇ゆう蔵ぞうは、棒ぼうきれを枝えだに向むかって投なげつけると、雨あめのよ

うに、白しろいうぶ毛げのある円まるい実みが、ころころと足あしもとにころげて

落おちました。

「炭すみも、煉れん炭たんも、じき、切きつ符ふ制せい度どとなつて、僕ぼくも仕し事ごとがなくな

るから、工場か、会社へ勤めようと思っているのさ。」と、  
 帰りに勇蔵が、達吉に話しました。

「自分は、田舎にいれば、いまごろ、くわを持って百姓をしてい  
 るんだが。」と、達吉は考えました。

ある日、伯父さんは、外出の支度をしながら、

「懇意の准尉さんで、陸軍病院に入っていないさるのを、こ  
 れからみまいにいくのだ。達吉も、いつしよにこないか。」と、  
 いいました。

達吉は、父親が戦死してから、戦争にいった兵隊さん  
 に対して、なんとなくいいしれぬ親しみをもちようになつたので  
 した。

「ひよつとしたら、お父さんのことが聞かれるかもしれない。」  
 と、思ったので、飛び立つように喜びました。

ひでりつづきの後なので、坂道を上ると、土のいきれが顔を  
 あおつて、むせ返るように感じました。一面に白く乾いて、歩くとほこりが立ち上りました。伯父さんは、幾たびとなく休み、額  
 からにじむ汗をふきました。

「ちつとも風がないな、一雨くるといいのだが、毎日降りそ  
 うになるけれど降らない。」と、ひとりごとのように、伯父さん  
 は、いいました。

木々の葉が、てらてらとして、太陽の熱と光のためにしおれ  
 かけて、力なく垂れているのが見られました。そして、せみの声

が、耳みみにやきつくようにひびいてきました。

「あの、高い、白い家が病院びょういんだ。」と、伯父おじさんは、彼方かなたの森もりの間に見える大きな建物たてものを指さしました。

二人ふたりは、いつかその病院びょういんの病室びょうしつへ案内あんないされたのでし

た。准尉じゆんいは、白い衣物きもののそでに赤十字せきじしるしの印しるしのついたのを被きて、

足あしを繻帶ほうたいしていました。その二階かゐから、ガラス窓まどをとおして、

下したの方ほうにはるかの町まち々まちまでが、さながら波濤はとうのつづくごとくな

がめられました。伯父おじさんと、兵隊へいたいさんと話はなしている間あいだに、日ひ

の光ひかりが陰かげつて、空そらは雲くもつたのでした。たちまち起おこる風かぜが、窓まどの

際きわにあつたあおぎりの枝えだを襲おそうと葉ははおびえたつように身みぶるい

しました。



「これは不気味な天候になったものだ。」

伯父さんは、あつけにとられながら、やっと口をききました。

そのとき、達吉が、准尉の顔を見ると、戦地へいつてきた兵

隊さんだけあつて、いささかのおじ気も色に見せるどころか、

かえつて微笑んでいました。

「戦争のときは、こんなですか？」

達吉は、ぴかり、ゴロゴロ、ド、ドンという電光と雷鳴

のものすごい光景に、父が戦死したときのことを想像して、

つい思ったことを口に出して、きいたのであります。すると、准

尉は、

「まったく、これと同じです。すこしも違いがありません。徐

州攻撃のときなどは、もつとひどかったです。」

「ほ、ほう、こんなですかな。」

「なにしろ、砲弾が炸裂すると、たちまち目の前が、火の海となりますからね。」

達吉は、あの、みんなから送られて、さびしい田舎道を

つた父親の姿を思い浮かべました。苦しくなつて、熱いものが

胸の裡にこみあげてきました。しかし自分は、いま兵隊さんの

前にいるのだと気がつく、彼は、我慢して、じつと、雷鳴の

遠ざかつていく空を見つめていました。そのうちに、雲が切れて、

青い空があらわれはじめたのであります。

薪炭屋の勇蔵は、いよいよ昼間は役所の給仕を勤めて、

夜は、勉強べんきやうをするため、学校がっこうへいくことになりました。

ここは、町の近くまちちかにあつた、原はらっぱです。子供こどもたちが、夏なつの日の午後ごごを楽しくボールを投げたり相撲すもうをとったりして遊あそんでいました。小さな弟妹ていまいの多い勇蔵ゆうぞうは、家いえにいれば、赤ん坊あかぼうを負おつて守もりをしなければならなかつたのです。だから、勇蔵ゆうぞうは、ボールを投なげる仲間なかまに入はいることもできなかつたので、ぼんやり立たつてほかの子供こどもたちの投なげるのを見物けんぶつしていました。

そのそばへ達吉たつきちがやってきて、

「勇ちゃんゆう、僕ぼくが、代かわつて赤ちゃんあかをおんぶしてやるから、君きみは入はいつて、ボールをおやりよ。」と、いつて、無理むりに勇蔵ゆうぞうから赤ん坊あかぼうを奪うばつて、彼かれに好きすきなボール投なげをさせようとしたのでし

た。

「達ちゃん、ありがとう。じゃ、十分間ばかりね。」

「もつと、長くたつてかまわない。」

ふたり、原っぱで、こんな話をしていたときでした。ちょうど

達吉の伯父さんは、町の一軒の家へいつて、壊れたといを修

繕していました。戸口に遊んでいた、長屋の子供たちは、屋根

の上で、眼鏡をかけて、仕事をしているおじいさんを見て、

「おじいさん。」と、親しげに声をかけました。

「あいよ。」と、伯父さんは一人、一人の子供の顔を見わけよう

とも、また注意をしようともしなかつたけれど、そのいずれに

対しても親しみを感じて、やさしく返事をせずにはいられなかつ

た。

「おじいさん！」と、子供たちは、いいお友だちを見つけたように、口々に、何度も同じ言葉をくり返して、熱心に仕事をしているおじいさんの注意をひこうとしたのであります。

達吉の伯父さんは、新しく造ってきた、ぴかぴか光るブリキのといをのき下に当ててみて、雨水の流れる勾配を計つていました。そのうち、不覚にも、腐れていたひさしの端へ踏み寄つた刹那であります。垂木は、年寄りの重みさえ支えかねたとみえて、メリメリという音とともに、伯父さんの体は地上へ真つさかさまに墜落したのでした。

子供たちは、びっくりして目をみはったが、つぎに怖ろしさの

あまり、悲鳴ひめいをあげて、

「たいへんだ！」と、叫さけびました。

長屋ながやじゆうのものが、総出そうでとなって、この気きの毒どくな老職人ろうしよくにん

の周しゆうい囲あつに集まりました。

「早く、家いえへ知しらさなければ。」

「それより、先さきに医者いしやへつれていくのだ。」

「おじいさん！」

「おじいさん、だいじょうぶか。」

一人ひとりが、抱だき起おこしながら、耳みみもとへ口くちをつけて呼よんでも返事へんじ

がなかったので、みんなの顔色かおいろは真まつ青さおになった。しかし、し

ばらくすると、身動みうごきをしたので、死しんでいないことがわかった

のです。

この話が、たちまち、口から口へ伝わって、あたりの騒ぎになると、原っぱに遊んでいた子供たちの耳にも入ったのです。勇蔵に代わって赤ん坊の守りをしながら、ボールを見ていた達吉の耳へも、一人の子供が飛んできて、伯父の災難を知らせました。

「ほんとう？」と、達吉は、寝耳に水の思いで、赤ん坊を負つたまま駆け出すと、脊中の子は、火のつくように泣き出した。それから、十分とたたためうちに、勇蔵が、リヤカーに伯父さんを乗せて引き、近所の人たちが車の左右に従い、町の中を両断する広い道路をすこしへだてた、骨つき医者へ連れていきま

した。もとより、達吉も、いっしよについていきました。

電柱でんちゆうに、「骨ほねつきもみ療治りようじ」と看板かんばんのかかっていると

ころから、路次ろじへ曲まがると、突き当たりつに表おもて側がわを西洋造りせいようづく

にした医院いいんがあります。入り口いにぶらさげてあつた金網あなあみのかがこ

の中なかに、せきせいとりいんこが飼かつてあつて、急きゆうにそうぞうしくなつ

たので、鳥とりはびつくりしたのか、目めをまるくしながら、甲高かんだかな

声こえでキイー、キイーといつて、奥おくの方ほうへ取り次とぎつをするごとく鳴な

きつづけました。

しかしながら、伯父おじさんは、打ちどころうちどころが悪わるかったので、つい

に五、六日いちにちめに亡なくなつたのであります。

孤児こじとなつた達吉たつきちに、こうして、また不幸ふこうがみまつたのでし

た。彼は、伯父さんが死んでから、後に残った伯母さんと、しばらく途方に暮れていました。勇蔵も、近所の人たちも、同情をしてくれたけれど、生きる道は、畢竟、自分が働くよりもほかにないということを彼は自覚したのです。そのとき、伯父さんの仲のよい友だちであったペンキ屋の親方が訪ねてきて、「手が足りなくて困っているのだ。おれのところへきて働いてくれないか。」と、いいました。

達吉はすでに働くことと決心したからには、どこだってかまわなかった。彼は、すぐいくことにしたのです。ペンキの入ったかばんをぶらさげて、高い屋根へ上るのは容易なことではありませんでした。びくびくすると、かえって両脚がふるえました。

「平気で、どんなところでも、鼻唄をうたつて歩けるようにならんければ、一人まえとはいえない。」と、親方は、笑いました。

「そうだ、人間のできることで、自分にできぬというはずはない。」と、齒ぎしりをして、たとえ危険な場所へでも、親方が上るところへは、自分も上つていったのでした。

かくして、一年とたたぬうちに、彼はもう大胆にりつぱに、仕事ができるようになりました。

あるとき、親方は、つくづくと彼の仕事ぶりを見ていたが、「おまえは、いつまでも、ペンキ屋で暮らそうとは思わないだろうが、いったいなにになりたい気なのだ。」と、彼にききました。

「僕は、軍人になりたい。」と達吉は、答えたのです。いつか准尉にあつてから、彼はそう心の中で思つたのでした。

「軍人にか、それはいい。おまえは、脊は低いが、なかなか強情だから、いい軍人になれるだろう。」と親方は、達

吉の意見に、反対しませんでした。

勝ち気の達吉は、同じ年ごろの少年が学校へいくのを見たりすると、うらやむかわりに、夜も、疲れた体を小さな机の前にもたせて、航空雑誌を読んだり、地理や、歴史を復習したりしていました。そして、昼になれば、彼は、普通の子供たちなら、とうてい上がれない、目のまわりそうな高い建物の頂に立つて、

「<sup>がっこう</sup>学校で<sup>べんきよう</sup>勉強<sup>おと</sup>するよりか、こんなところで、大人といつしよに<sup>しごと</sup>仕事をする己<sup>おれ</sup>のほう<sup>えら</sup>が、よほど偉いんだぞ！」と、だれに向<sup>む</sup>かつていうとなく、<sup>ひと</sup>独りで<sup>ごうご</sup>豪語<sup>し</sup>しました。

それは、<sup>かれ</sup>彼が、<sup>とうきよう</sup>東京へきてから、<sup>み</sup>三たびめに<sup>むか</sup>迎える<sup>なつあつ</sup>夏の暑<sup>ひ</sup>い日<sup>ひ</sup>のことでした。

<sup>みどり</sup>緑の多い<sup>おか</sup>丘<sup>た</sup>に建<sup>た</sup>つていた<sup>きようかいどう</sup>教会堂<sup>まえとお</sup>の前<sup>とお</sup>を通<sup>とお</sup>りかかると、<sup>ひと</sup>たくさん<sup>あつ</sup>人が集<sup>あつ</sup>ま<sup>あつ</sup>つて、<sup>とう</sup>塔<sup>うえ</sup>の上<sup>うえ</sup>をな<sup>うえ</sup>が<sup>うえ</sup>めていました。

「どうしたんですか。」

「あのたくさんなからすが、はとをねらっているのですよ。」

このごろ、どこのごみ<sup>す</sup>捨<sup>す</sup>て場<sup>ば</sup>をあ<sup>す</sup>さ<sup>す</sup>つても、<sup>く</sup>あまり<sup>もの</sup>食<sup>く</sup>い物<sup>もの</sup>が<sup>み</sup>見<sup>み</sup>つからないので、<sup>とかい</sup>都会<sup>とかい</sup>にすむ<sup>う</sup>餓<sup>う</sup>えたからす<sup>よわとり</sup>たちは、<sup>よわ</sup>弱<sup>とり</sup>い鳥<sup>とり</sup>をいじ

めてその肉を食たべることかんがを考かんがえついたのでした。それで、はどの巢すを襲おそつたのです。いつ、どこから飛とんできたのか、二羽わのはとは、ここを安あんぜん全ぜんな場所ばしょと思おもつて、塔とうの屋根やねに巢すを造つくりました。そして、やがて子こ供どもを産うんで、育そだてていました。これを知しつていて、からすは、いま計けい画かく的てきに、群むれをなしてやつてきたのです。早はやくも悟さとつた親おやばとは、巢すの奥おくの方ほうへ二羽わの子こばとを隠かくして、母ははばとは、胸むねで子こ供どもをおおい、たぶんそれは父ちちばとでああつたでししょう、いちばん端はしにううずくままつて、体からだで巢すの入いり口ぐちをふふさぐぐようようにして、敵てきとにらみ合あつていまいました。

どうなることかと、達たつきち吉きちもいいつしよにななつて、見みていまいました。すると、その中なかの獯どうもう猛もうな一羽わのからすが、ふいに父ちちばとに飛とび

かかつて、とうとう巢すから外そとへ引きずり出してしまいました。待まつていたとばかり、ほかのからすたちが、四方ほうから寄よつてたかつて、哀あわれなはとを奪うばい合い、最後さいごに血ちにまみれたはとを屋根やねの上うえへたたきつけて、たがいにくちばしでちぎりはじめたが、あつという間まに、こうかつな一羽わがその屍かばねをさらつてどこかへ飛とび去さると、あわてて三羽わ、四羽わ、その後あとを追おいかけていきました。

「なんて、ひどいことをしやがる。まだ、あの巢すの中なかには、はとがいるから、それも喰くい殺ころされるだろう。」

こういつて、見みている人々ひとびとが、小石こいしを拾ひろつて、からすに向むかつて投げつけていた。しかし、石いしはそこまでとどきませんでした。からすは、石いしの当あたらないのを知しっていて、こちらのことは気きに

も止めずに、だんだん巢の方へ近寄つて、じつと機会をねらつて  
 いました。

「わるいやつだな。」と、達吉は、つくづく思いました。彼の胸は、憤りのために、どきんどきんと鳴りだしました。

おそらく、子供を救うために、自分を犠牲にしようと思つたのでしよう。ふいに、母ぼとが、巢から飛び出した。からすが、なんで、それを見逃そう。我先に獲物にありつこうと翔るはとむ向かつて突進しました。母ぼとは、巧みに方向を変えて、子供たちのいる巢から、敵を遠方へ遠方へと誘つたのであります。見てみると、塔の頂の空を高く二、三回もぐるぐるまわつてから、下の町の方へ、できるだけだけの速度で、飛び去つてい

きました。その後を、カアカアと叫びながら、黒くなつて、から  
 すが執拗に追いかけていききました。

けれど、まだ二羽、三羽、意地悪いからすが残つていて、どこ  
 へも去らずに、塔の屋根に止まつて、険しい目で巢をねらつてい  
 ました。そこには、親鳥を失つた、かわいそうな子ばとが怖ろ  
 しさのためにふるえているのでした。それと知つた、達吉は、  
 もうなんで我慢ができませんよう。

「よし、あの不埒なからすめを追いはらつてくれよう。そして、  
 子供を己の懐に抱いてきてやろう。」

達吉は、人々がなんといつてもかまわずに、柵を乗り越え  
 て、寂然とした教会堂の敷地内へ入り込み、窓わくを足

場として、さるのごとく、といを伝つて、建物の壁を攀じり、急角度に傾斜している屋根へはい上がろうとしました。

「おうい、やめろ、あぶないぞう！」と、下からわめく声がきこえました。この声は彼の耳に入ったけれど、

「なに、くそ……。」と、彼は、返事をするかわりに、歯ぎしりをしていた。

突然、人間の頭が、によつきりと屋根の端から伸び上がる、と、さすがにからすは、これに敵わぬと思つたか、いちはやく、どこかへ逃げていきました。

スレートの面は、太陽の熱で油を流すごとく焼けていて、足の裏へ、針を刺すように痛さを感じさせた。

「もう、降りろう！」と、見ていたものの中から注意するものがあつた。

達吉は、ただ登らなければならぬ気がしていた。顔を上げる

と、まだ巢のところまで三、四メートルありました。同時に下を

見ると、すぐ近く大きな木が目に入り、四方へ張った枝の柔らか

な緑色は毛氈を拵げたように、細かな葉が、微風にゆれて

いました。そして、こんな際に、どうしてか、いつか病院の

窓から見た、あおぎりの幻覚が浮かんだ。

「己は、どうすればいいのか？」さつと感激の失せた刹那、自

分のすることがわからなくなり、心がぐらつく足の間で

なくなつて、体がずるずると下へ滑りはじめた。堅いスレートに

はどこにもつめの立てようがない！

彼は、絶体絶命を感じた。数秒の後に、自分の体が、

幾十尺の高いところから地上に落下して粉碎するのだと意識するや、不思議にも、気力が出て跳ね上がった。彼は、

屋根を蹴ると、眼下の大木を目がけて、それにしがみつこうと

して飛んだ。

軽業師にやれる離れわざなら、なんで人間生死の瀬戸際にできぬというはずがありません。

達吉は、天地が真つ闇だった。大波が、自分を呑んだ。体

は前後上下に揺れていた。わずかに、目を開けると、しつかり

と自分にはけやきの木の枝にしがみついていた。

「おお、己は、生きているぞ！ 己は、助かつたのだ。お父さんに誓います。僕は、軍人になります。神さまに誓います。僕は、かならず飛行兵になります。」

とつさに、希望が頭にひらめいた。どこを見てもただ明るく、さんらんたる光のうちにいるのを発見した。どこかで、がやがや人の声が、きこえるような気がしたけれど、達吉は、ただ、手足に力を入れて、どうしても強く生きなければならぬということだけしか考えていかなかった。

このときの、彼の目は、からすの目よりも、さどくいきいきと輝いて、いったん心につかんだものを一生逃すまいとしていました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

初出：「新児童文化 第3冊」

1941（昭和16）年7月

※表題は底本では、「僕《ぼく》はこれからだ」となっています。

※「彼《かれ》は、  
屋根《やね》を」は、第1刷では「彼

《かれ》は、夢中《むちゆう》で屋根《やね》を「ですが、第3、  
3、4刷では「彼《かれ》は、 屋根《やね》を」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 僕はこれからだ

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>